
オレと、ご主人様。

神城水都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレと、ご主人様。

【NZコード】

N4750A

【作者名】

神城水都

【あらすじ】

オレと、「主人様・南は一人暮らし。ある日南は言った。「今日、ウチに健太郎呼ぶから」……何だつて？！オレという男がいながら、男を呼ぶ？…そんなユウキと南の物語。

十一月某火曜日午前六時。

外出するのにはまだ早いこの時間、オレと連れの南は、近所の公園の並木道を歩いていた。

昨日が晴天だったせいで、今日の冷え込みは一段と厳しい。そのため南は時折、

「うー、寒い」

などと呟く。

スマン、南。オレに付き合わせて。
口には出さなかつたけど、オレはそつ思つていた。そして、そ知らぬ顔で歩いていく。

両側に生えているのはイチョウやケヤキの木。もうすっかり葉が落ちて、裸の枝を、雲一つない青空に広げている。そろそろ霜が降るかな。冬はすぐ傍まで迫つていた。

「いいなあ、ユウキは。暖かそう。私は寒いー」

南が言った。お前、さつきから寒い、しか言つてないぞ。因みにユウキつてのはオレの名前。

「まあな。確かに寒くはない」

そう答えるものの、ふと思つ。お前だつてしまかり着込んでいるから、オレとそう変わらなじじゃないか。

「私は夏生まれだから、寒いのは苦手なの。元暑いのは平氣だけど」

何、その理屈。当たり前だけど、抗議する。

「南サン、オレだつて夏生まれですケド……。暑いのは苦手ですが、何か？」

「確かに、ユウキ、夏は暑苦しそう」

何が楽しいのか、嬉しそうと言つた南。はしゃぐなよ。

オレは今、南の『夏生まれは何とかかんとか』という理屈を覆したはずだぞ。なのに抗議しないなんて。この女、気付いていないな。

そんな南は、笑いながら爆弾発言を落とす。

「あ、そういうえば今日、健太郎をウチに呼ばうと思つただけだ」

その言葉に、不覚ながらも、オレは一瞬止まつてしまつた。

何ですと！？今、何とおっしゃいましたか？健太郎を呼ぶだつて？

「だからコウキ、部屋汚さないでね」

南はのん気に続ける。「冗談じやないぞ。

オレは、切実にうつたえた。

「南、お前何言つてんの。オレという男がいながら、別の男を部屋に呼ぶだなんて」

すると南は、笑いながら、

「何いつてんの、コウキ」

と言つて、オレの頭を軽く叩く。そして、

「あんた、犬じやん。」

と言つた。

「ムッ。まあ、確かにオレは、生物上じやあ犬に分類されるだらつた。けど……」

「けど？」

「オレと南の愛の巢に他の男を呼ぶのは、やつぱりオレに対して……」

ボカツ。

失礼だろ、と全部言い終わらない内に、南がオレの頭を殴つた。

「痛つてー！何すんだよ。お前なんか動物虐待の容疑で、動物愛護団体に訴えられるべきだ」

半分は冗談だつたのに、殴るとは。

本氣で痛い。犬だから、患部を押さえられないのが辛い。前足が届かないからだ。

「ユウキが、懲りずに変な事言つからでしょ。犬のクセに

動物を虐待した事に、何の罪悪感も感じていない様子で、南が言った。

犬。そう、オレは犬だ。英語で言えばdog。生まれて一年と一ヶ月、拾われてからは十一ヶ月。何故か喋れるボーダーコリー。（何故喋れるかは、ノーコメント）

それがオレを説明する言葉。

対して健太郎は、南と同じ大学の同級生。そして高校から南と付き合っている彼氏。勿論、人間。

オレは、コイツが嫌いなんだ。

確かに、オレは新参者。南と過ごした年月だってあっちの方が多い。

でも、嫌いなものは嫌いなんだ。

南はオレの唯一のご主人様。あの日、餓えと寒さに震えていたオレを拾ってくれた、命の恩人。

憎まれ口も言つけれど、いつも感謝している。

「ホラッ。帰るよ、ユウキ」

思考の淵に沈んでいたオレを、南が呼ぶ。

「そうだな、帰るか」

南が、オレのリードを引っ張る。辺りは大分明るくなってきた。南は、相変わらず

「寒いなあ」

と呴いている。でも、今日も晴れそうだ。

オレと南は、帰つていった。

お世辞にも広い、とは言えない築三十五年のボロアパートの一室。

現在オレと南が暮らしている部屋だ。

その内部のやはり狭いキッチンには、小さなテーブルが一つと、向かい合う様に置かれた椅子が二つある。その一つに南が座り、も

う一つにオレが座るのが、この家の食事スタイル。

今、オレの目の前にはドッグフードが置かれていた。向かい合つた南は、既にトーストを食べている。

そう、オレはいわゆる『おあづけ』を食らっている状態だ。何でも、散歩中に、変な事を言つた罰らしい。

でも、きちんと躰られたできる犬のオレには、こんな事苦でも何ともないさ！

「……ユウキ、口からよだれ垂れてる。汚いなあ……」

「ムツ、それは気のせいだ。速やかに忘れる」

まあ、いくらできるオレでも、腹が減つては戦が出来ない。

ここは一つ、『上目使い作戦』決行だな。

「ユウキ、そんなに食べたいの？」

ノーコメント。その間もオレは、ウルウルした大きな瞳で、南を見つめ続ける。

南はハア、と溜め息を吐いて、

「じゃあ、『よし』」

と言つた。

ミッショングンプリート。オレは、さつきまでの悲劇的な犬の表情をかなぐり捨て、驚異的なスピードで食べ終えた。

「じゃあ、行つて来まーす。水は、いつもの所だから。ユウキ、散らかさないでね」

そんな事しねーよ。

「行つてらつしゃい」

ガチャンとドアを閉めて、南は出て行く。向かう先は大学。

南が出て行きヒマになつたオレは、テレビを付けた。お田淵では、教育テレビの英語講座。

オレは、英語が話せる犬になりたい。日本語だつて話せるんだ。英語だつてその内話せるだろ？

オレは、画面を見つめた。その中では、ライオンや鳥などのない

ぐるみが駆け回っている。

オレの瞼は、次第に重くなってきた。

南と胸ぐそ悪い匂いに、オレはガバッと起きた。

どうやら寝ていたようだ。ライオンの英語講座を見ていたはずなのに、いつの間にか画面では囲碁を打っている。そんな物、誰が見るんだよ。テレビを消して、オレは玄関まで駆け寄つて行つた。

「ただいま」

「お邪魔しまーす」

南と、あの男の声。南は、出迎えたオレに氣付くと、しゃがみ込んで、

「コウキ、いい子にしてた？」

と、頭を撫でる。オレは、

「クゥーン」と言つて、その手を舐めた。アイツの前で喋るわけにもいかないからな。

そして南が一步引くと、あらうことかあの男が抱きしめてきた。
ぬおー、止めんか！男、特にお前なんかに抱きしめられたって、これっぽっちも嬉しくないわつ。

よつぽどこの男の肩でも噛み付いてやろうか、とも思つたが、南の顔を見た途端その気も失せた。

そうだな、オレはできる犬なんだ。主人様に恥を塗るわけにもいかない。

だから決して、南の顔がテレビで見た般若にそっくりで怖かったから、じゃないぞ！

オレは、動かないしつぽを叱咤して、パタリ、パタリと動かした。可哀想なオレのしつぽ。

そんなオレを一瞥した南は、またしても爆弾発言を投下。

「ねえ、健太郎。コウキの散歩に行つてくれる？私は夕飯を作つているから」

はあ？ちょっと待て。それはオレに対する嫌がらせか？

「あつ、いいよ。俺も犬好きだし」

だから、アンタも快く承諾してんじゃねえよ。

しかし悲しい事に、人間社会での犬の地位、っていうのは本当に低い。オレがこんなにも目で訴えかけているのに、

「じゃあ、リードはあそこだから」

と、物事は勝手に進んでいく。

いづしてオレは、大嫌いな男と散歩に行くことになった。

オレは今、非常に不機嫌だつた。あの男は、オレをガードレールに繋いで、コンビニに入りやがったんだ。南はこんな失礼な事しなかつたぞ。

数分後、あの男は、

「お待たせ」

と言いながら出て来た。そして、

「じゃあ行こうか」

と言ひ。

仕切つてんじゃねえよ、と言おうとしてオレは、

「ワン」

と、一言呟えた。

「ハハ、お前賢いなあ。返事が出来るんだ」

……思いつきり勘違しされたみたいだけど。

そしてオレ達は、河原にいた。こんな所、南との散歩では来たことがない。この男、どうするつもりだろう。

あの男は、コンビニ袋をゴソゴソかき回し、何か薄い物を取り出した。

「ほらお前、これ取れるか?」

果たしてそれは、フリスピード。

馬鹿にするなよ、との意味合ひを込めて、

「ワン」

と一言、鋭く吠える。

「よし、じゃあそれ！」

男は投げた。大空をクルクルと飛んでいくフリスビー。

すると突然、オレの体は奇妙な感覚に襲われた。

嗚呼、ボーダー「リーの血がたぎる。魅惑的な円い物質がオレを呼ぶ。

気付いた時には、オレは走り出していた。フリスビーに追いつくと、オレは華麗にジャンプして、空中でキャッチした。

この快感。何て形容すればいいんだろう。すうじく心地良かつた。

オレは、フリスビーをくわえたままあの男の所まで走り寄つて行く。

「よしよし、お前すごいなあ。初めてなんだろ」

フリスビーを離すと、アイツがオレの頭を撫でた。

まあ、これしきの事オレにとっては朝飯前だ。せいぜい褒め讃えがいい。

「よし、もう一度」

そう言つてフリスビーを、もつと遠くへ投げるアイツ。オレの体は、再び反応していた。

そうしてオレ達は、しばらく遊んでいた。気付けば、辺りは既に暗かつた。

「そろそろ帰るか」

アイツが言う。うん、その方がいい。遅くなつたら叱られそうだ。その時、オレのリードを持つかと思われたアイツの手は、またコンビニ袋をあさり始める。

「そうだ、ユウキ。これ、お前にやつひとつ思つて買つたんだけど。食べるかな？」

その言葉の最後は自分へ向けて言つていたようだ。

そしてアイツが袋から何かを出す。ここからでは、暗くてよく見えない。

しかし、封を切つた瞬間、オレにはピペッジと来た。

辺りを充満させたこの匂いの正体は、ビーフジャーキーだ。しかもこれは、いつもテレビCMで羨ましく思っていたボン太君のではないか！

「『褒美だぞ。南はこういうの、くれないんだろ？』

全く持つてその通り。お前、メチャクチヤ気が利くじゃないか。だから早く頂戴い！

初めて食べたビーフジャーキーは、とても美味しかった。これら毎日でも食べていきたい。

そして同時に、健太郎とは気が合つかかもしれない。そう思った瞬間だった。

オレは今、非常に不機嫌だった。やっぱり前言撤回！ 健太郎は、イイ奴でも気が利く奴でも何でもない。オレの早とちりだった。

今は夕食。なのにオレは床に這いつぶばって、皿の前のドッグフードを睨んでいる。

何故かって？ それはあの男のせい。アイツがオレの椅子に座つてやがるんだ！

オレは不機嫌さをアピールするため、せっかくから何度も唸つていた。しかし、その都度入る南の

「コウキ！」

という叱り声。

本当にやつてられない。悪いのは健太郎なのに。

そんな訳で、夕食はサイアクだった。

「じゃあね。また明日」

といつも挨拶と、

「ああ、また来る

というあの男の声。

もう来んな、と一人ここちながら、オレはこの至福の瞬間を噛みしめていた。

やつとアイツが帰つて行く。どれだけ待ち望んでいただろ。

玄関の扉が閉まる音がして、南が来た。

「アイツ、帰つたんだろ?」

「健太郎? 帰つたけど」

オレは久しぶりに日本語を話した。吠えるだけっていうのも、なかなか辛い。

「なあ、ゲームしない? 昨日の続き」

やつと二人になれたのが嬉しくて、オレは南を誘つた。なのに、「今はダメ。私、お風呂に入つてくるから」

風呂だつて? ふざけんなよな。

「じゃあ、オレも一緒に……」

「ダメ。昨日一緒に入つたでしょ? じゃあね」

取り付く島も無い。南は手を振りながら、浴室へと消えて行つた。一人、取り残されたオレは、ポカンとしていた。そして同時に、怒りがフツフツと沸いてくる。

何だよ。オレを除け者みたいに扱いやがって。

オレは、南が消えていったドアを、いつまでも睨みつけていた。

「あがつたよ、ユウキ」

数分後、浴室の方から南の声がした。

「ゲームするの?」

「……」

オレを除け者にした事を、すっかり忘れていたような南。絶対に答えてやるもんか。

オレは背中を向けた。

「どうしたの?」

「……」

あくまで沈黙を守るオレ。

すると、南は声を少し尖らせた。

「ユウキ、黙っていたんじゃ分からない。何か言つてよ」

オレが怒られる謂われは無いのに。」今まで言われたんじや、黙つていられない。オレだつて力チンときた。

「……だったら言わせてもらいますよ？」

振り向きながらオレは言つた。その言葉に、たつぱりの恨みを込めて。

「言つとくけどな、南が悪いんだぞ」

「私？」

「そう。お前」

オレの不機嫌の理由は全て南（それと健太郎）にあるというのに、「イツときたら氣づいていなかつたらし」。余計に憎たらしくなつてくる。

「えつ、何で？」

驚いた口調で言つ南。

「……健太郎……」

オレはボソツと呟いた。そして続ける。

「アイツのせいでオレ、朝からずつと不機嫌だつたんだぞ」「健太郎？」

「南さ、アイツを呼ぶといつもアイツばつかり構うじやん。オレ、お前の飼い犬なんだぞ。家ではオレの相手をしてよ」以前からずつと言いたかった事を、今日やつと言つことができた。それは、オレを構つて欲しい、という事。

これは嫉妬なんだろうな。犬だから決して人間には勝てないオレの。

「そう、『メンね、ユウキ』

オレの言いたい事は伝わつたみたいだ。南は、真剣な顔で謝つた。

「まつ、別にいいけどさ」

オレは少し照れくさくなつて、言葉をばぐらかした。

「分かつたら、もうアイツ、呼ぶなよ。オレ、今日は椅子に座れなかつたし」

仲直り出来たからか、オレは調子に乗つてしまつた。

「ホラ、アイツなんかと付き合ってたって、良いことなんかないさ」「だから、言わなくていい事まで言つてしまつたんだ。

「この際別れちゃえよ、あんなヤツ。どうせ結婚とかしないんだろ」「でも、言つてしまつたからもう遅い。オレは、その事を後悔する事になる。

「それにあつちだつて、そんな気……」

「ユウキッ！」

突然大声を上げた南。

オレは、この時初めて言い過ぎたかな、と思つた。

「アンタみたいな犬つて、本当に最低！」

「なつ……」

確かにオレは最低な犬だ。飼い主に口答えするなんて。

南は、その目に涙を浮かべていた。そして突如立ち上がり、オレに背中を向ける。

「つてオイ、どこへ行くんだよ」

慌てて止めようとするオレ。でも、それを振り切つて南は進む。

「ユウキなんか、拾わなきゃ良かつた！」

ドスドス、ガチャン。

呆気に取られている間に、南は出でていつてしまつた。

「何だよ、アイツ。何でいきなりキレてんだよ。犬を相手に」「思わず呟いてみたけど、少し虚しかつた。もう後の祭りだ。最後に見た南の背中は、昔見たあの人间と、少し似ていた。

南が出ていつて二十分。オレは、すっかり後悔していた。
本当は追いかけてでも謝りたかったけど、それは出来ない。このアパートのドアは、犬の手では開けられないんだ。
オレは溜め息を吐いた。さつきから、最悪な事ばかり考えてしまう。

「このまま南が帰つて来なかつたら？」
「オレ、捨てられるかもしねりない。

そんな考えを捨てるように、ブルブルと頭を振った。

オレはこの不安を知っている。昔の事だ。あの時は南が救つてくれた。でも今は？

オレはトボトボと歩き出す。南が恋しくて、ベッドへ潜り込んだ。そこは、南が使っているシャンプーの匂いがした。

南の香りに包まれていると、少し安心してきた。

田を闊じると、あの時の事を思い出す。そう、オレが生まれた時

の事を……。

オレは去年の九月に生まれた。

最初の頃は幸せだった。母さんがいて、五匹の兄弟がいて。そしてご主人様がいた。

オレ達はいつも遊んでいた。オレは末から二番田の生まれで、甘つたれだった。

夜はいつも、みんなで丸まつて眠った。そんな安心で、幸せな毎日。でもその生活は、長くは続かなかつた。

十一月のある日、オレ達は段ボール箱に入れられ、橋の下へ連れて行かれた。

あの時は、それが捨てられる、という事だとは思わなかつた。新しい遊びかな、と思つただけだつた。

ただ、そこから立ち去るあの人の背中は、よく覚えている。今でも思い出すと、虚しいような、やるせないような、そんな気分になるんだ。

そうしてオレ達は捨てられた。

そこからは大変だつた。オレ達六匹の幼い兄弟は、力を合わせて生きなければならなかつた。

オレ達は、精一杯生きた。でも現実は厳しい。半月も経たない内に、まずは妹が死んだ。餓えだつた。

オレ達には、悲しんでいる暇は無かつた。すぐに冬がやって来たからだ。

冬になると、食べていく事が、ますます難しくなった。体が大きくなつた分、もつとたくさんの食べ物が必要だからだ。すぐに一匹死んだ。

そして雪。

雪が降ると、凍えそうな程寒かつた。オレ達は、段ボール箱に固まって、ブルブル震えていた。

そしてまた、一匹死んだ。残つたのはオレと、すぐ上の兄貴だけ。アイツとは、一番仲が良かつた。

あの日は朝から大雪が降つていた。視界が悪く、たよりの鼻も調子が良くない。

後から知つた事だけど、その日は十一月二十四日。人間でいう所のクリスマス・イヴだつたんだ。

だから当然いつもより、人も車も多い。

オレ達は、警戒しなきやいけなかつたんだ。人が多いつて事は、それだけ危険も増す。オレに言わせれば人間なんてエゴの塊だからな。

でも、オレ達は浮かれていた。普段と違う街並みや、どこからか漏れてくるいい匂いに、すっかり興奮していたんだ。

それがいけなかつた。だから気付かなかつた。ヤツらの存在を。保健所。それはオレ達野良犬にとって、最も警戒しなきやいけない所。

オレ達は、あろうことかその職員に見つかってしまったのだ。

捕まつたら殺される。オレ達は必死で逃げた。

でも所詮は子犬。距離は段々と縮まり、今にも捕まりそうになつた。

オレは、サツと横道へ逸れた。分散した方が、捕まる危険性が減ると思ったからだ。

オレはバカだつた。大雪で視界が悪い事、鼻が利かない事をすっかり忘れていた。

突如、眩しい光がオレを照らす。オレは、車の前に飛び出していったのだ。

オレは悟った。

そうか、どうどう死ぬのか。

オレの体を衝撃が襲う。吹っ飛ばされて、転がるオレ。でも、何故か死んでいなかつた。ムクリと立ち上がる。体中が痛かつた。

その時やつと理解した。すぐそこには、血まみれで転がる兄貴の体。

オレは、すぐさま駆け寄つた。その紅く染まつた体を、必死で舐める。

「……逃げ、る……」

それが、兄貴の言葉の言葉だつた。

オレは、走つた。走つて走つて、走り続けた。

涙が、後から後から溢れては、落ちていつた。どうやって段ボーリ箱まで帰つたかも覚えていない。

兄貴はバカだ。オレなんかを庇うなんて。

死ぬのはオレだつたハズだ。なのに、何で……。

でも、その兄貴よりバカなのはオレだ。

オレは兄貴を殺してしまつた。オレが死ねば良かつたんだ。

とうとうオレは、一匹になつてしまつた。何をする氣も起きなかつた。死んで、兄弟の元へ行こうとも考えた。

その時、人間の気配がした。オレは、サッと身構えた。

今思えばバカだよな。ついさつきまで、死ぬ氣でいたのに。

果たして、そこへ来たのは、南だつた。オレが駆け込むのが見えたらしい。まあ、当時はそんな事、知らなかつたけど。

オレは、近づいてきた手に、とつさに吠えた。人間なんて信用出来ない。

「ホラ、怖がらないで。キミ、捨てられたの?」なのに、尚も近

づいてくる手。

オレに構うな。

「ウゥウ、ワン！」

オレは、その手を噛んだ。そうすれば、去ると思ったからだ。

「大丈夫。傷付けないから大丈夫」

驚いた事に、ソイツ（南）は、オレを抱き上げた。オレは、本気で噛んだのに。

「ヨシヨシ、ヒドい目に遭つたんだね。もう大丈夫」

その腕の中は、暖かかった。まるで昔、母さんに抱かれていた時みたいに。

「キミ、ウチへ来る？」

オレは、急に申し訳なくなつた。この人間は、本気でオレを案じてくれている。

「じゃあ、帰る。『ウチ』に

「クウーン」

その後、ここへ連れてこられたオレは、南に何から何まで世話を見てもらつた。再び始まつた安心出来る生活。

だからオレは、南に感謝している。

一度は、死のうと思つた。そんなオレを拾つてくれたのは、南ただ一人だ。

南に謝りたい。このまま捨てられるのは、嫌だ。

ガチャ。

玄関のドアが開いた。オレの鼻が、夜風とともにに入つて來たのは南だと告げる。オレはベッドを抜け出した。

南は、靴も脱がずに立つていた。ただオレを見ている。

オレは氣まずさから、傍に寄る事が出来ないでいた。謝ろう、と思つたのに。

不意に、南の表情が和らいだ。

「コウキ」

情けない事に、ギクッとするオレ。
何を言われるんだろう。

南は、

「おいで」

と言つて両腕を差し伸べた。

オレは、トボトボと歩いて、近寄つた。そして、南に抱き締められる。シャンプーの香りと、少し、健太郎の匂いがした。

「……こんな事されたって、嬉しくないぞ」
やっぱり照れくさくて、素直に言えない。

「その割には、尻尾振つてるけど……」

「ムツ。気のせいだ。速やかに忘れる」

オレは、口とは違つて正直な尻尾を諫めようと、少しだけ努力した。けれどもダメだつた。嬉しかつたから。

「コウキ、もしかして、捨てられるとか思つた?」

オレは、その言葉にギクッとした。その通りだからだ。
「な、そんな事思つてねえよ」

南は、本当に?と言つて、空を見つめる。静かに語り出した。

「コウキ。私はこの先何があつても、コウキを捨てたりなんかしないから」

オレは、その言葉に、目頭が熱くなつた。

「……うん、サンキュー。……それと、さつきは「ゴメン」……」

オレは、南を直視出来ず、ボソボソと言つた。

南は、少し笑つて、オレを抱き締める手に、力を込めた。

「私の方こそゴメン。犬相手に何やつてんの、つて健太郎にも言われちゃつた」

ムツ。やはり健太郎の所へ行つてたのか。

「だからコレ、仲直りの印だよ」

そう言つて、南がコートのポケットから取り出したのは、

「ボン太君のビーフジャーキーじゃないか!どうしたの?」

南がこんなに気の利くヤツだつたとは。オレは感動した。
「コレ? 健太郎がやつたらどう? ってアドバイスくれたの」
健太郎のヤツか。

アイツとは気が合うかもな。一回にそつ思つた瞬間だつた。

それから、まあオレ達は順調に暮らした。

確かにケンカもあつたけど、いつも仲直り出来た。

そうそうオレ、英語もマスターしたんだ。今は中国語を勉強中。
できる犬つていいのも大変だ。

あと、オレが喋れる事、健太郎にもバレた。アイツ、そんなに驚
いてなかつたな。

こんな感じで、まだまだ色々あるんだけど、それはまた今度の機
会に。
じゃあな。

(後書き)

ムダになくなってしまった。 (苦笑)

この話のネタは、風呂に入つていて思付きました。前の短編よりは明るいですね。

次回は、連載を更新しようと思っています。やうやく是非読んで下さい。
それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4750a/>

オレと、ご主人様。

2010年11月30日03時30分発行